

授業で使える当館所蔵地図

No. 92 『蝦夷国全図』

原図作成年：1785年（天明5年）

サイズ：55×95cm

原図作者：林子平



【解説】

1785年（天明5年）に刊行された林子平の『三国通覧図説』の付図5枚の中の一つ。それまで万国か本邦の地図はあったが隣国の地図がなく国防・行政に必要として著された。そして、蝦夷国全図は刊行物として日本初の北辺図となった。図説は蝦夷地の記載に多くの量がさかれ、シベリアやカムチャッカ半島までその論は及んだ。

★1 林子平

江戸時代中期の経世家。寛政三奇人の一人。仙台藩士林子平は、給与もなく兄の世話をうけて生活していた。しかし、子平はこの身軽さを利用して大槻玄沢ら蘭学者と交わって海外事情を研究。次いで長崎に外遊して、中国の商人やオランダ人から海外情勢について知識を得た。『三国通覧図説』、『海国兵談』などで外国による日本侵攻の危機を指摘し、軍備の拡張や海岸防備の強化を主張した。しかし、幕府は「奇怪異説」を説いて人心を惑わすとして版木を没収し、禁錮刑を科して弾圧した。

★2 蝦夷地

現在の北海道。ロシア人と日本人がはじめて接触をもったのは18世紀後半と言われている。ロシア人はオホーツク海でラッコ猟をしていたようで、当時のシベリアに住むロシア人たちは本国から遠く離れているため常に食糧不足などに悩まされていた。そのため、日本と交易することで必要物資を得ようとしたが、当時の日本は鎖国政策をおこなっていたため、この要求を断った。

その結果、1792年（寛政4年）にはラクスマンがエカチェリーナ2世の命により通商要求のため根室に来航することに繋がった。

★3 『 COREA AND JAPAN 』 1815年（文化12年）作成
Thomson's New General Atlas（画・彫刻）



* 林子平が蝦夷地全図を発行した約30年後にスコットランド人が作成した地図。現代の日本とその近隣地図の原型とほぼ近い地図となっている。外国人たちは遠く離れた東アジアについても関心があり、高い測量技術があったことが伺える。

【用語について】

・ロシアの対外政策

ロシアは領土が莫大にも関わらず、不凍港（1年中凍らない港）がなく、バルカン半島や中央アジアに勢力を拡大する動きを見せていた。その初期段階の出来事が18世紀末のラクスマンの根室来航、19世紀初頭のレザノフの長崎への来港だった。

江戸幕府の鎖国政策を解いたのはアメリカだったが、19世紀にロシアは更なる南下政策を進め、中国東北部まで侵攻し、朝鮮の支配を進める日本と1904（明治37）年には日露戦争を起こすことになった。

【利用の例】

○江戸幕府の対外政策の違いを考えることができる。

（例）・田沼意次は工藤平助により『赤蝦夷風説考』が献上され、蝦夷地の調査を行った。

・松平定信は『海国兵談』を著した林子平の『三国通覧図説』を発禁処分にした。

○鎖国状態であった日本の中には危機感をもつ人がいたことに気付くことができる。

→工藤平助・林子平など

○ヨーロッパ人が日本を含めた東アジアに興味・関心を抱いていたことに気付くことができる。

→日本人以上に正確な地理情報を掴んでいた。

→シーボルトも『大日本沿海輿地全図』を日本から持ち出そうとしていた。